ザントラルトによるグリューネヴァルト伝（本伝及び補遺）[1]

大杉千尋

《キーワード》グリューネヴァルト、ザントラルト、画家伝

十七世紀ドイツの画家であるヨアヒム・フォン・ザントラルトは『高貴なる建築・彫刻・絵画のドイツ・アカデミー』（以下『ドイツ・アカデミー』、図一）の著者として知られている。彼はドイツにおけるヴァザーリ、あるいはカレル・ファン・マンデルたらんと志し、体系的な芸術理論書兼画家伝として『ドイツ・アカデミー』を刊行した。一巻は一六七五年、二巻は一六七九年にそれぞれドイツ語で、三巻はそのラテン語の要約版として一六八三年に出版された。三十年戦争を経て政治的、経済的のみならず文化的にも衰退期にあったドイツにおいて、『ドイツ・アカデミー』は非常な歓迎を受けた。一八九六年にシュポンセルが詳細な文献批判を行い、同書の多くが先行するイタリアやオランダの美術理論書からの引用に負っていることを指摘したが、[2] 特に画家伝においては今なお資料的価値が認められる。

本稿では『ドイツ・アカデミー』一巻及び二巻において記述されるグリューネヴァルト伝について日本語訳を行う。ザントラルトの記述は、画家の作品や生涯を概観できるほとんど唯一の資料であり、グリューネヴァルト研究において避くべからざるものであると同時に、以下に見るように作品の成立や受容についての様々な問題を孕んでいるためである。なお、［　］内は訳者による。

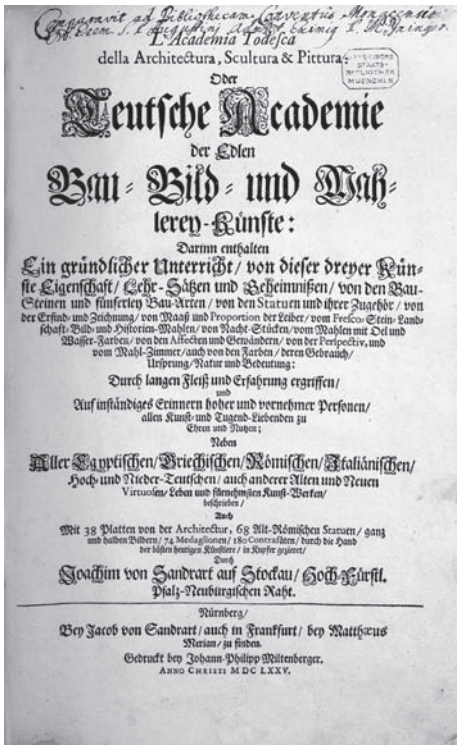
Academia Teodesca
della Architectura, Scultura & Pittura:
Oder
Teutsche Academie
der Edlen
Bau- Bild- und Mahlerey-Künste:
Darinn enthalten
Ein gründlicher Unterricht/ von dieser dreyer Künste Eigenschaft/ Lehr-Sätzen und Geheimnißen/ von den Bau-Steinen und fünferley Bau-Arten/ von den Statuen und ihrer Zugehör/ von der Erfind- und Zeichnung/ von Maaß und Proportion der Leiber/ vom Fresco/ Stein/ Landschaft- Bild- und Historien-Mahlen/ von Nacht-Stücken/ vom Mahlen mit Oel und Wasser-Farben/ von den Affecten und Gewändern/ von der Perspectiv, und vom Mahl-Zimmer/ auch von den Farben/ deren Gebrauch/ Ursprung/ Natur und Bedeutung:
Durch langen Fleiß und Erfahrung ergriffen/
und
Auf inständiges Erinnern hoher und vornehmer Personen/ allen Kunst- und Tugend-Liebenden zu Ehren und Nutzen;
Nebst
Aller Egyptischen/ Griechischen/ Römischen/ Italiänischen/ Hoch- und Nieder-Teutschen/ auch anderer Alten und Neuen Virtuosen/ Leben und fürnehmsten Kunst-Werken/ beschrieben/
Auch
Mit 38 Platten von der Architectur, 68 Alt-Römischen Statuen/ ganz und halben Bildern/ 74 Medaglionen/ 180 Contrafakten/ durch die Hand der besten heutigen Künstlern/ in Kupfer gezieret/
Durch
Joachim von Sandrart auf Stockau/ Hoch-Fürstl. Pfalz-Neuburgischen Rahts.
Nürnberg/
Bey Jacob von Sandrart/ auch in Frankfurt/ bey Matthæus Merian/ zu finden.
Gedruckt bey Johann-Philipp Müttenberger.
Anno Christi MDCLXXV.

図1　ヨアヒム・フォン・ザントラルト『高貴なる建築・彫刻・絵画のドイツ・アカデミー』1巻 1675年 タイトルページ

…

SANDRART, J. v., *Die Teusche Academie der Bau-, Bild- und Mahlerey-Künste*, 1.1, Nürnberg/Frankfurt, 1675, pp. 236-237.［グリューネヴァルト本伝］

マテウス・グリューネヴァルト、あるいはマテウス・フォン・アシャッフェンブルクと呼ばれている人物は、[3] 古ドイツのあらゆる最高の才能の中でも高貴なる素描及び絵画芸術において何者にも席を譲ったり引けを取ったりせず、最も卓越していて最高の画家であるとまではいかなくても、実のところそれと同等と評価できるものである。しかし残念なことに、この卓越した人物は自らの作品とともに忘却に追いやられていたために、彼のしたことについてわずかな文字や口伝えの記録だけでも与えてくれるような存命中の人すら私は知らない。しかし彼の威厳を明らかにするために、私の知っている限り格別に入念に報告したい。そうしなければ、この美しい記憶は完全に消え去ってしまうだろうと思う。

すでに五十年前のことだが、非常に年老いてはいたが芸術的才能に満ちたフィリップ・ウッフェンバッハという画家がフランクフルトに住んでいた。[4] 彼は以前高名なドイツの画家グリマーの徒弟であった。[5] このグリマーは上述のマテウス・フォン・アシャッフェンブルクのもとで修行し、彼について集められるだけのものを熱心に保管していた。彼はとりわけ自分の師匠の死後、様々な見事な素描を未亡人からもらい受けた。それらの多くは黒チョークで描かれていて、一部はほぼ等身大であった。このグリマーの死後、それらのほとんどは上述の思慮深く高名なフィリップ・ウッフェンバッハのものになった。私はその当時フランクフルトの彼の家から遠くないところで学校に通っており、彼を時折訪問した。彼が上機嫌の時には、その場で一つの冊子に綴じたこのマテウス・フォン・アシャッフェンブルクの貴重な素描を私に見せてくれたが、それにならって彼は勤勉に素描を勉強したのであって、その賞賛すべき質と豊かさを私に打ち明けてくれた。この冊子は全て上述のウッフェンバッハの死後、その未亡人によって高名な美術愛好家であるフランクフルトのアブラハム・シェルケンス氏に高額な値段で売られた。他の見事な、語るには多すぎる新古の最も良き絵画と本、そして版画からなる芸術作品群と並んで、その冊子は彼の高名な美術陳列室に置かれた。この賞賛に価する描き手を永遠に記憶し、全ての芸術愛好家にとっての楽しみとするためである。それゆえ私はそれについて、好意的な読者に示したかったのである。

この卓越した芸術家は一五〇五年ごろ、アルブレヒト・デューラーの時代に生きていた。このことはデューラーによるフランクフルトのドミニコ会修道院にある聖母被昇天の祭壇画から推定できる。[6] なぜなら祭壇画が閉じられたときの外側の四枚の翼画として、明るい色調の灰色と黒でもってこのマテウス・フォン・アシャッフェンブルクが絵を描いたからだ。一枚目には炮烙を持った聖ラウレンティウスが、もう一枚には聖エリザベトが、三枚目には聖ステファヌスが、そして四枚目には忘れてしまったが別の絵が、非常に上品に描かれていた（図二、三、四、五）。それは今日なおフランクフルトのまさにその場所で見ることができるとおりである。[7] しかしとりわけ賞賛すべきは彼によって水彩[8]で描かれたタボル山におけるキリストの

変容である（図六、七、八、九、十）。中でもまず、驚くべき美しさの雲があって、そこにモーセとエリヤが出現している。彼らとともに地面に跪く使徒もいる。これらは彩色の創意とあらゆる優美さでもって卓越した方法で描かれているので、何物も唯一性において超越することができない。それどころか、それは技巧と特質という点で無比であり、あらゆる優雅さの母である。[9]

更に、この高貴な手による三つの祭壇画がマインツ大聖堂の内陣の左側にある三つの別々の礼拝堂にあった。それぞれに内外どちらも描かれている二枚の翼画が付属している。その内の最初のものは雲の中にいる聖母子で、彼らを聖カタリナ、聖バルバラ、聖カエキリア、聖エリザベト、聖アポロニア、聖ウルスラといったたくさんの聖人たちが地面から見上げている（図十一、一二、十三、十四）。全てが気高く、自然に、優美に、そして正しく素描され、また彩色されているので、地上というよりはむしろ天上にいるように見える。[10]別の板絵には盲目の隠者が描かれていて、導き手の少年とともに凍ったライン川の上を歩いている。彼は氷の上で二人の殺人者に襲われ殴り殺されて、叫んでいる少年の上に倒れている（図十五、十六）。その絵においては激情と修練の上に、自然の真に迫った着想が積み重ねられている。[11]三枚目は前の二枚に比べればいくらか出来が良くない。これらは皆、一六三一年か一六三二年にその当時の

図3 《聖キリアクス》1507-1509年頃 フランクフルト シュテーデル美術館

図2 《聖ラウレンティウス》1507-1509年頃 フランクフルト シュテーデル美術館

図5 《聖女》1507-1509年頃 カールスルーエ クンストハレ

図4 《聖エリザベツ》1507-1509年頃 カールスルーエ クンストハレ

図 6 《フランクフルトの変容のための倒れる使徒の習作》1510-1511 年頃 ドレスデン 版画素描室 C 1010-42

図 9 《頭を覆った男性》1510-1515 年頃 ベルリン 版画素描室 AM 23-1953

図 7 《フランクフルトの変容のためのペテロの習作》1510-1511 年頃 ドレスデン 版画素描室 C 1910-41

図 10 《跪いて指差す男性（パリサイ人）》1510-1515 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 4190

図 8 《仰ぎ見る男性の習作》1510-1511 年頃 ベルリン 版画素描室 AM 22-1953

図 12　《聖カタリナ》1509-1511 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 12038

図 11　《雲の上の聖母子》1509-1511 年頃 ロッテルダム ボイマンス・ファン・ベーニンゲン美術館 MB1958/T29

図 14　《聖ドロテア》1509-1511 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 12035

図 13　《指輪または花を持った聖女の未完成習作》1509-1511 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 12038（図 12 の裏面）

図 16　《泣き叫ぶ子供の頭部》1515-1520 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 12319

図 15　《泣き叫ぶ子供の頭部》1515-1520 年頃 ベルリン 版画素描室 KdZ 1070

無秩序な戦争の中で奪い去られ、スウェーデンに船で運ばれた。しかし他の同じような芸術作品と並んで海難事故により海の底に沈んでしまった。

彼の手になるもう一つの祭壇画がアイゼナハにあるという。そこには賞賛に値する聖アントニウスと窓の後ろにいる悪魔の姿が非常に丁寧に描かれているそうである（図十七）[12]。更に、亡きバイエルン公ヴィルヘルム［五世］殿下は分別ある判断者として、また高貴な芸術の愛好家として、聖母と聖ヨハネ、そして跪いて祈るマグダラのマリアが大変に丹精を込めて描かれた小さな磔刑図を持っていて（図十八）[13]、誰によるものかは知らないながらも非常に愛しておられた。この絵は大変奇妙なことにキリストが十字架の足の部分に非常に傾いて乗っているために、［絵の中ではなく］実際この世で起こっているかのように、他の全ての磔刑図を超えて自然に即して本当らしく描かれている。そのような点は分別ある忍耐をもって長い間思いを巡らせれば気づくことである。上述のヴィルヘルム公の恵み深いご命令によりこの絵は一六〇五年にラファエル・サデラー

図 17　《聖アントニウス》〈イーゼンハイム祭壇画〉第一面 右翼 1512-1516 年頃 コルマール ウンターリンデン美術館

によって銅版画になった（図十九）。[14] 私はのちにその画家の名前を明らかにしたので、故マクシミリアン［一世］選帝侯殿下はお喜びになった。

更にヨハネ黙示録に基づく入手困難な木版画もこの画家の手になるもののようだ。[15] また、私がローマにいた時、両手を組んで顔を後ろに反らして、まるで十字架上のキリストを見ているかのような聖ヨハネの像があった。きわめて敬虔で心を打つもので、等身大で、格調高い優雅さを備えていたので大変尊重され、アルブレヒト・デューラーの作品であるとみなされていた。しかし私は、それが誰の手になるものであろうと、それをはっきり見極めて様式の違いを示したあと、油絵の具（それで私はその当時教皇の肖像を描いた）で裏面に「ドイツ人マテウス・グリューンヴァルト描く

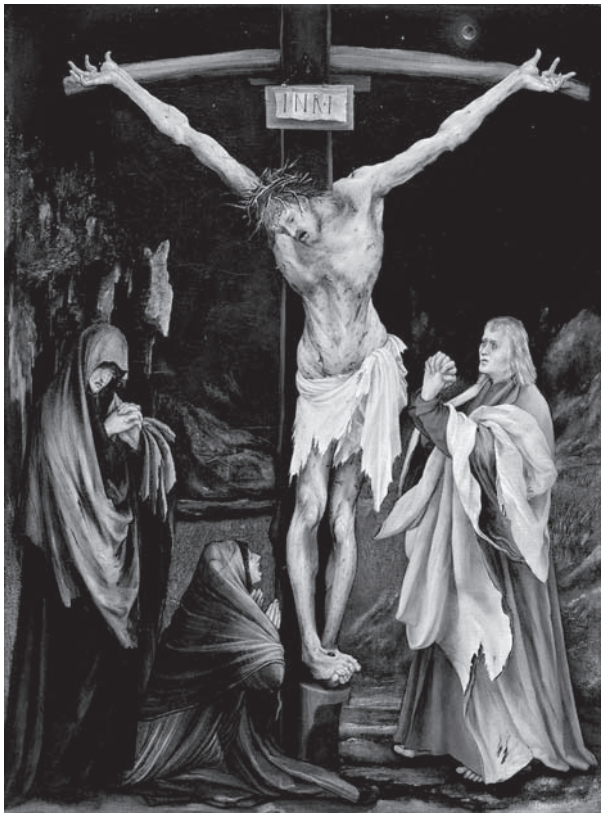

図 18　《キリスト磔刑》1551/1520 年頃 ワシントンナショナル・ギャラリー

Matthaeus Grünwald Aleman fecit」と名前を記入した。[16] さて、以上が卓越したこのドイツの画家について私の知っていることである。そのほか、彼はおおむねマインツで過ごしていて、俗世から離れた憂鬱[17]な生を送り、その結婚生活は不幸であった。いつどこで亡くなったか私にはわからないが、それは一五一〇年ごろのことだったようだ。[18] 図版二〇〇が彼の肖像である（原図一）。[19]

SANDRART, J. v., *Die Teusche Academie der Bau-, Bild- und Mahlerey-Künste*, 2.3, Nürnberg/Frankfurt, 1679, pp. 68-69［グリューネヴァルト伝補遺］

この卓越していて高邁な精神と、そして驚くべき画家自身に関して、すでに前の巻の二三五ページに、彼の他を超える経験の豊かさについて死後の名声を伝えるために詳しく報告した。特にフランク

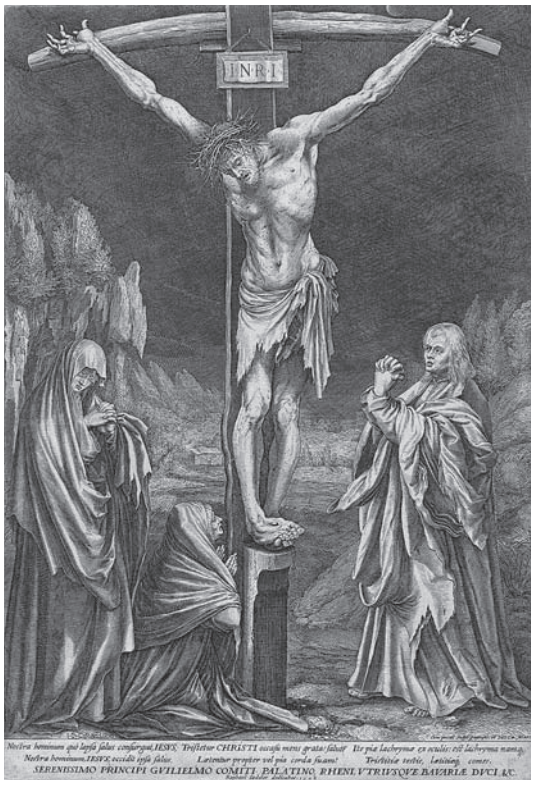

図 19　グリューネヴァルト原画 ラファエル・サデラー版刻《キリスト磔刑》1605 年 エングレーヴィング

フルトのドミニコ会のための輝かしい作品についていえば、例えば祭壇画に描かれた聖エリザベト、聖ステファヌス、聖ラウレンティウス、そして名前［のわからない誰かがいる］。その上[20]に救い主イエス・キリストのタボル山での変容がある。そこにはモーゼとエリヤが雲の中でキリストの前に姿を現していて、同様に下にある山では畏れに我を忘れた使徒たちがいる。[21]同様にマインツ大聖堂にあった祭壇画群にも言及した。この祭壇画群はスウェーデン軍によって持ち去られたが、それを免れたものはあらゆる芸術の保護者として高名なハーグのペーター・スピリング・フォン・ノルトホルム氏が所蔵していた。画家自身の手になる非常に申し分ない素描は今なおフランクフルトのアブラハム・シェルケンス氏のもとにあって、彼が自然と聖霊のもとで奇跡を行った並外れた画家であることを教えてくれる。私としては彼に関して知る限りのことを記録し、前の巻に彼の肖像画をも挿入したが、それはアルブレヒト・デューラーとグリューネヴァルトが上述のフランクフルトのドミニコ会修道院にあるヤーコプ・ヘラーの祭壇画を制作した際、デューラーがグリューネヴァルトの姿を写したものであり、[22]図版二〇〇に挙げた。しかし同肖像画は当時若かった彼を写し描いたものなので、それより後、栄誉ある当帝国都市［ニュルンベルク］の市参事会員で収集家のフィリップ・ヤーコプ・シュトローマー氏が、私にこの画家のもっと年長の頃の更に完全な肖像画を見せてくれたので、この高邁なドイツのコレッジョを讃えるため、図版四にその肖像画を添えて、［読者と］分かち合いたいと思う（原図二）。

原図１　フィリップ・キリアン版刻《グリューネヴァルト》1675 年 エングレーヴィング

原図２　ヨアヒム・フォン・ザントラルト原画 リヒャルト・コリン版刻《グリューネヴァルト》1679 年 エングレーヴィング

註

（1）本稿はペルツァーの編集による画家伝部分のみが抜粋された注釈付きの復刻版を底本に、適宜１９９４／１９９５年の完全な復刻版も参照した。PELTZER, A. R., *Joachim von Sandrarts Academie der Bau- Bild und Mahlerey-Künste von 1675*, München, 1925; SANDRART, J. v., *Die Teusche Academie der Bau-, Bild- und Mahlerey-Künste*, Nürnberg/Frankfurt, 3 vols., 1675/1679/1683（Rep. Ed.: Nördlingen, 1994/1995）. また、フランクフルト大学とフィレンツェ美術史研究所が作成している『ドイツ・アカデミー』のオンライン・エディションをも参照した（http://ta.sandrart.net/de/ ２０１５年12月25日閲覧）。なお、訳出に当たっては安井雄一郎の部分的な日本語訳を参考にした。安井雄一郎「ザントラルトとグリューネヴァルト―バロック期に生まれた一伝説」『デアルテ』12、17―42頁。

（2）SPONCEL, J. L., *Sandrarts Teusche Academie kritisch gesichtet*, Dresden, 1896.

（3）ザントラルトによって誤って与えられた「グリューネヴァルト」という名はチュルヒの研究によって覆され、マティス・ゴットハルト・ナイトハルトという本名が明らかにされた。ZÜLCH, W. K., *Der historische Grünewald, Mathis Gothardt-Neithard*, München, 1938.

（4）Philippe Uffenbach（一五六六―一六三六年）. SANDRART 1994/1995, 1, p. 293-294; PELTZER, p. 160; ANDRESEN, A., *Der Deutsche Peintre-Graveur. Oder die deutschen Maler als Kupferstecher von dem letzten Drittel des 16. Jh.s bis zum Schluß des 18. Jh.s*, 4, Leipzig, 1973（Rep. Ed.: New York, 1969）, pp. 313-324; ThB, 33, p. 538.

（5）このグリマーがハンス・グリマー（Hans Grimmer, 一五二八以前―一五六〇年頃）か、その息子アダム・グリマー（Adam Grimmer, １５５５／一五六〇年頃―一五九七年）のどちらを指すのかは明確ではない。ThB, 15, p. 51; AKL, 62, p. 292.

（6）アルブレヒト・デューラーとその工房による〈ヘラー祭壇画〉（一五〇七―一五〇九年、フランクフルト歴史博物館、ただし中央パネルはヨースト・ハーリッヒによるコピーのみ現存）を指す。同祭壇画は始め、フランクフルトのドミニコ会修道院のためにヤーコプ・ヘラーによりアルブレヒト・デューラーに委嘱された。祭壇画制作に関するデューラーからヘラー宛の一五〇七年から一五〇九年にわたる書簡九通が伝わっており、制作年代の根拠となっている。これはザントラルトの伝える制作年代と概ね一致する。前川誠郎訳『デューラー 自伝と書簡』岩波文庫、一〇五―一四〇、二六一―二六三頁。

（7）《聖ラウレンティウス》・《聖キリアクス》（一五〇七―一五〇九年頃、フランクフルト、シュテーデル美術館）、《聖エリザベツ》・《聖女》（一五〇七―一五〇九年頃、カールスルーエ、クンストハレ）の四点のグリザイユによる板絵を指す。聖ステファヌスは聖キリアクスの誤りであるが、これは聖ラウレンティウスのパネルとともに現在フランクフルトのシュテーデル美術館に所蔵されている。ペルツァーは残り二枚を行方不明としているが、これらは一九五〇年に再発見され、一九七一年以降カールスルーエのクンストハレに所蔵されている。このうちザントラルトが記していない四枚目の翼画には棕櫚の葉を持った女性の聖人が描かれているが、人物の同定については一定の見解をみない。Ex. Cat. *Deutsche Gemälde im Städel 1500-1550*, Städelmuseum, 2005, p. 366. これらのパネルからなると考えられる〈ヘラー祭壇画〉全体の再構成については以下を参照。DECKER, B., *Dürer und Grünewald, der Frankfurter Heller-Altar. Rahmenbedingungen der Altarmalerei*, Frankfurt, 1996, p. 11; Ex. Cat. *Grünewald und seine Zeit*, Staatliche Kunsthalle Karlsruhe, 2007/2008, pp. 127-134; Ex. Cat. *Dürer. Kunst, Künstler, Kontext*, Städelmuseum, 2013/2014, pp. 219-233. 少なくともザントラルトの時代においては先の四点の板絵は同祭壇画の固定翼として設置されていたことがこの記述から理解できるものの、それが当初からの状態であったかどうかには疑問が残る。グリューネヴァルトのグリザイユと〈ヘラー祭壇画〉との当初の関連には次の二つの解釈が存在する。（1）ヘラーはデューラーに〈ヘラー祭壇画〉を制作させたのち、それを補完するパネル

をグリューネヴァルトに制作させた。（2）ヘラーは同時期に別々の祭壇画をデューラーとグリューネヴァルトにそれぞれ注文し、二つの祭壇画はザントラルトの時代までに分解・統合された。安井、前掲書、二十頁。

（8）原文 Wasserfarben。仮に「水彩」と訳したが、フレスコとも考えられる。FEUERSTEIN, H., *Matthias Grünewald*, Bonn, 1930, pp. 81-83; WEIXLGÄRTNER, A., *Grünewald*, Wien/München, 1962, pp. 37-41. また、布に下地を用いず描かれた絵 Tüchleinbild であったとする説もある。Ex. Cat. Frankfurt, 2005, p. 370.

（9）逸失。この作品の準備素描として五点の素描が挙げられている。ROTH, M., *Matthias Grünewald. Die Zeichnungen*, Ostfliedem, 2008, pp. 11-13, 24-33. また、本稿註二十一をも参照。

（10）逸失。グリューネヴァルトはマインツ大司教アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクの宮廷画家であった。この聖母子の祭壇画のための準備素描として四点の素描が指摘されている。ROTH, *op. cit.*, pp. 36-40.

（11）逸失。この祭壇画の主題を決定付けるのは困難である。大聖堂にあった諸礼拝堂が捧げられた聖人のうちザントラルトの記述に最も合致することから、聖ランベルトゥスの殉教を描いた絵であると推定する研究者もいる。SCHMID, H., A., *Die Gemälde und Zeichnungen von Matthias Grünewald*, 2, Strasbourg, 1911, p. 276; PELTZER, p. 389. 一方、マインツの守護聖人の一人聖アルバンだともいう。MARTIN, F.-R./MENU, M./ RAMOND, S., *Grünewald*, Paris, 2012, pp. 218-224. しかしいずれの聖人も、盲目、隠者、殉教というザントラルトの記述とは完全には一致しない。なお、この祭壇画の準備素描と思われるものについて、二点の《泣き叫ぶ子供の頭部》（ともに一五一五―一五二〇年頃、ベルリン、版画素描室）が指摘されている。ROTH, *op. cit.*, pp. 67-70.

（12）イーゼンハイム祭壇画についての記述。原文 "Es soll auch noch ein Altarblat in Elysenach von dieser Hand seyn..." とあることから、ザントラルトはこの祭壇画について伝聞のみによって記述していると考えられる。アイゼナハはイーゼンハイムの誤りであり、アイゼナハに別の祭壇画があったわけではないと考えられている。BOLL, W., "Eine Grünewaldnotiz aus dem 18. Jahrhundert". *Beiträge zur Geschichte der deutschen Kunst*, 1, 1924, pp. 171-172; MEURER, S., "Sandrart und seine Leser. Zur Rezeptionsgeschichte der Teutschen Academie". EBERT-SCHIFFERER, S./MAZZETTI DI PIETRALATA, C.（ed.）, *Joachim von Sandrart. Ein europäischer Künstler und Theoretiker zwischen Italien und Deutschland. Akten der internationalen Tagung Rom（Bibliotheca Hertziana）*, München, 2009, pp. 233–244.

（13）この絵は一九六一年以来ワシントンのナショナルギャラリーが所蔵する、いわゆる《小磔刑》だと考えられている。FRIEDLÄNDER, M. J., "Grünewalds einst beim Bayernherzog bewahrte Kreuzigung". *Jahrbuch der Preussischen Kunstsammlungen*, 43, 1922, p. 60; SCHARF, A., "Alte Malerei aus Rheinisch-Westfälischem Privatbesitz. Die Jubiläumsausstellung des Kunstvereins für die Rheinlande und Westfalen in Düsseldorf". *Der Cicerone*, 21, 1929, p. 370.

（14）LE BLANC, C., *Manuel de l'amateur d'estampes*, 3 Paris I, p. 401; RAMAIX, I. de., *Rafael Sadeler I,（The Illustrated Bartsch*, 71.1）, New York, 2006, pp. 41-42; HOOP SCHEFFER, D. de（ed.）, *Aegidius Sadeler to Raphael Sadeler II（Hollstein's Dutch and Flemish Etchings, Engravings and Woodcuts ca. 1450-1700*, 21）, Amsterdam, 1980, p. 220.

（15）ペルツァーはこの記述に関してマティアス・ゲールングとの混同を指摘している。PELTZER, p. 390. マティアス・ゲールングはヨハネ黙示録の版画連作を一五八八年頃に制作している。ThB, 13, pp. 487-488; AKL, 52, p. 320.

（16）逸失。ザントラルトは教皇ウルバヌス八世の肖像を描いている（SANDRART 1994/1995, 1.2, S. 12; PELTZER, p. 31）。その際このヨハネの絵を見た可能性をペルツァーは指摘している。PELTZER, p. 390.

（17）原文 melancholisches。メランコリーの概念と芸術家との結びつきについて

は以下を参照。R・クリバンスキー／E・パノフスキー／F・ザクスル、榎本武文／尾崎彰宏／加藤雅之訳、『土星とメランコリー：自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』晶文社、一九九一年（KLIBANSKY, R./ PANOFSKY, E./ SAXL, F., *Saturn and Melancholy. Studies in the History of Natural Philosophy, Religion and Art*, London, 1964）; R・ウィットコウアー／M・ウィットコウアー、中森義宗／清水忠訳『数奇な芸術家たち：土星のもとに生まれて』岩崎美術社、一九六九年（WITTKOWER, M./ WITTKOWER, R., *Born under Saturn. The Character and Conduct of Artists. A Documented History from Antiquity to the French Revolution*, London, 1963）。

（18）これはザントラルトの誤りであり、実際の没年は一五二八年であることがフランクフルトの市立文書館所蔵の画家の遺産目録からわかる。Institut für Stadtgeschichte Frankfurt a. M., S. 5/28 12.（消失した原本：Inventar 1528 Nr. 16）; 拙論「グリューネヴァルトの遺産目録」『美術史論集』十四、二〇一四年、（八）―（三十一）頁。

（19）ここに挙げられている肖像と、補遺に挙げられた肖像の関係については以下に詳しい。安井、前掲書、二十一―三十三頁。

（20）前文最後から続いて、原文N. oberhalbでチュルヒはN. をR. とし、「右上に」と解釈した。ZÜLCH, *op. cit.*, p. 115。しかしフェッターはN. と読み、oberhalb から新しい文章が始まると考えてチュルヒの説を修正した。VETTER, E. M., "Die 'Hellerflügel' Grünewalds und das Verklärungsretabel der Dominikaner in Frankfurt". *Jahrbuch der Staatlichen Kustsammlungen in Baden-Württemberg*, 13, 1976, p. 30. これは二〇〇七／二〇〇八の展覧会においても採用されている。Ex. Cat., Karlsruhe, p. 128.

（21）この記述を巡って研究者の議論が続いている。この記述から、少なくともザントラルトの時代においては、失われた《キリスト変容》が〈ヘラー祭壇画〉に付属したいわゆる「上部飾り」であったと考える研究者もいる。ZÜLCH, *op. cit.*, p. 115; DECKER, *op. cit.*, p. 45. 一方、この《キリスト変容》が〈ヘラー祭壇画〉とは別の板絵、あるいは祭壇画であったとする解釈も存在する。RUHMER, E., *Grünewald. The Paintings*, London, 1958, pp. 115-117; VETTER, *op. cit.*, pp. 25-54.

（22）ただし、〈ヘラー祭壇画〉制作の際グリューネヴァルトとデューラーが対面し、また肖像の制作が行われたという事実については、ザントラルトの記述以外に信頼できる記録がなく疑問視されている。デューラーが描いたという図二〇〇（本稿原図一）の原画素描は現在ヴォルフ・フーバーに帰属されている。Ex. Cat. *Meisterwerke der Graphischen Sammlung. Zeichnungen, Aquarelle und Collagen Katalog der Ausstellung Frankfurt*, Städelmuseum, 2008, p. 62.

文献略号一覧

AKL: MEISSNER, G.（ed.）, *Allgemeines Künstlerlexikon*, 87 vols. to date, München/Leipzig, 1992- .

PELTZER: PELTZER, A. R., *Joachim von Sandrarts Academie der Bau- Bild und Mahlerey-Künste von 1675*, München, 1925.

ThB: THIEME, U./BECKER, F.（ed.）, *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart*, 37 vols., Leipzig, 1999.

図版出典

原図一、二、図一：Die Bayerische Staatsbibliothek（https://www.bsb-muenchen.de/）

図二―十六：ROTH, M., *Matthias Grünewald. Die Zeichnungen*, Ostfieden, 2008.

図十七：Ex. Cat. *Grünewald und der Isenheimer Altar. Ein Meisterwerk im Blick*, Musée d'Unterlinden, 2007.

図十八：National Gallery of Art, Washington（http:// http://www.nga.gov/）

大杉千尋（おおすぎ・ちひろ）
２００９年　神戸大学文学部卒業
２０１１年　神戸大学大学院人文学研究科博士課程前期課程修了
現在　神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程在学中